



第③回

健やかな死へ(後編)
今日は死ぬのにもってこいの日

自然で穏やかな死、の続きです。グループホームで暮らしていた健康自慢の五郎さんは、92歳の春ごろから足が急に弱り、食糧量が減って痩せていき、熱が出たときは点滴をし、反応が乏しくなり、尿量が減り……あちらの世界に移っていく気配が濃くなりました。

6月、グループホームのスタッフは「そろそろその時が近い」という判断で、訪問診療を頻回に依頼しました。「医師の診察から24時間以内なら検死扱いにならないので、落ち着いた日中に訪問診療を」と家族と相談していたのです。

6月初めの日曜日、訪問診療のとき。息子一家が見舞い、息子も孫も医療関係者だったので、五郎さんの胸に聴診器をあて脈をとりました。少し話をすることもでき、孫たちにとって貴重な経験になりました。

14時ごろ、娘が部屋に入ると、五郎さんのそばには日頃から仲のよい介護スタッフがいて「いま息を引き取られましたよ」と迎えました。娘はスタッフから穏やかな最期の様子を聞きながら、五郎さんのまだあたたかく柔らかな手を握り、頬をなで、涙しながらも満ち足りた気持ちでした。

知らせを聞いた息子も病室に戻り、訪問診療医がもう一度来て死亡確認をし、しばらく思い出話。

その日のスタッフは、不思議なことに五郎さんと気が合う人ばかりで、仕事の合間に部屋に寄っては思い出話をしていきます。「この部屋は窓の眺めがいい、って気に入ってましたね」「早起きでしたから、朝方よく窓の外の朝焼けをご覧になったんですよ」。なにげない会話が、家族とスタッフにとって貴重なグリーフケアのひとつです。

そのまま夕方まで、家族は五郎さんのそばでゆっくり過ごすことができました。特に持病がなく過ごせた自然な老衰は、果実が熟して枯れて地に落ちる

ような「健やかな死」でした。

夕方、葬儀社の迎えが来て、五郎さんの遺体が車に乗るときには、手の空いているスタッフが玄関に集まっての見送りでした。家族は「父の良いことも悪いこともよく知っているみなさんに見守られて旅立てて、本当によかった」と、改めて心からの感謝を伝えました。

“最後の交流”は終生大事な記憶に

お葬式の打ち合わせが終わり、ふと空を見上げると青い空に白い雲が輝いています。娘は「ああ、父はあの空に昇っていった」という思いと『今日は死ぬのにもってこいの日』というアメリカ・インディアンの本のタイトルが思い

浮かんだ……と話していました。

息子は、亡くなった後も父親のベッドサイドでゆっくり過ごし、スタッフと思い出話をしたことを喜び、「苦しみや恐れ」が多い病院ではこうはいかない、自分だったらこういうのもいい、とつぶやいていました。また、病院では、最期が近づくと家族を呼んで死に逝く人のそばについてもらうが、それは家族にはつ

らすぎる、と気づいたそうです。

妻の認知症は進んでいます。「お父さん、みんなに分からないように私の手をぎゅっと握ってたのよ」と言います。亡くなる少し前に見舞ったとき、五郎さんが強く握手して「ありがとう、さようなら」と言ったことが、温かな思い出として記憶に残ったのです。

人生最期の時間をどう過ごしたかは、遺族それぞれにとって終生心に残る記憶になるんですね。



さまざまな人生最後の光景
『今日は死ぬのにもってこいの日』
(ナンスー・ウッド著、めるくーる社)

むらかみきみこ◎ターミナルケア・医療安全・在宅ケアのテーマで、国内各地、海外10か国を継続取材。主な著書に『患者の目線—医療関係者が患者・家族になってわかったこと』(医学書院)、『納得の老後—日欧在宅ケア探訪』(岩波新書)。